

◆戦略的思考の復権――猪俣津南雄・闘いの軌跡

龍井 葉二

0.はじめに

・2022年＝日本共産党結成100年 猪俣没後80年

「格差と貧困」→100年前の社会状況・運動状況との共鳴

・猪俣の略歴：1889年新潟生まれ、長岡中学卒業→苦学の末に 米国留学→ロシア革命の影響
下で在米日本人社会主義者団・国共産 党の活動に参加→1921年に帰国、第一次共産党の結成に
参加→ その後、第二次共産党に不参加→1927年に雑誌『労農』の同人 に→29年に脱退→執筆
活動と並行して労働運動・運動に関与→1 937年人民戦線事件検挙→42年死去

・猪俣(たち)の活動展開がなぜこうした形態をとったのか？

○猪俣の批判活動とその思想的特質

1. ロシア革命インパクト

(1) 革命理論(唯一の)としての「マルクス主義」の確立

階級闘争→歴史的発展段階 下部構造→上部構造

(2) 世界各国の革命指導部としてのコミンテルンの設立

共産党＝コミンテルン支部 モスクワ発の「テーゼ」

(3) ロシア革命(二段階)を規範とした革命の定式化

→「第一か第二か？」(日本共産党最初の綱領論議)

(4) 中央集権的な前衛党モデルの確立

軍事モデル 前衛党による階級意識の外部注入

↓

各国の革命運動にどんな問題をもたらしたか？

2. 猪俣が直面した運動＝組織問題

「支部」建設の任務をもって日本へ――

① 普通選挙への対応と(山川らの)ボイコット論

② 共産党事件後の取り調べに対する警戒心の欠如

③ 無産政党結成準備段階の徳田らのセクト主義

④ 労農党分裂後の無産政党合同問題での福本らのセクト主義

⑤ 共産党(第二次)の再建をめぐる対立

⑥ 弾圧後の新党準備会の対応と市川らの玉砕戦術

⑦ 日本大衆党結成後の清党問題をめぐる内部対立

⑧ 労働組合再建＝全産結成をめぐる山川らとの対立

⑨ 合法的労働組合の再建と非合法路線に走る共産党の対応

⑩ 反ファシズム統一戦線の形成とそれに消極的な共産党の対応

・共産党との対立＝「同一陣営内」→内部改革を求める

- ・戦略論争:闘争の目標は? + 誰を中立化・無力化するか?
=組織対立の根拠としての論争 →単なる綱領論争ではない
- ・その後も「支部」再建を模索



インパクトの枠組みそのものへの批判も含む

3. 「マルクス主義」への対応

(1) 「彼等を見よ」(第一次共産党事件後)

現代の賃金労働が一片の道具、歯車と化し、創造の歓びや遊戯・愛・誇りから追い出されている→それに対する嫌悪が叛逆に=「本能的な抵抗」

階級意識=「闘争のうちからのみ」生まれる(その萌芽は戦友意識)、マルクスの名も階級闘争の理論も知らない労働者たちの、空疎と重圧から逃れようとする本能的努力から「にじみ出る

労働者たちの憎悪:器械化や被雇を強いる世の中の組み立・仕組みへ発展→社会的不公正を取り除く可能性という「漫然たる信念」に到達

社会の生産機関の事実上の担い手・操縦者→「建設的理想主義の歴史的基礎」

→マルクス主義の図式との乖離

(2) 「現代日本ブルジョアジーの政治的地位」

いわゆる封建的絶対主義勢力について「物質的基礎を欠いたものがなぜ存在し得るのか」と提起→「制度・イデオロギーとしての残存」を指摘

4. 「コミンテルン」への対応

(1) 「27年テーゼ」の策定に向けて

・米国からの帰国時の課題:日本の政治経済・運動状況の分析→共産党事件後に産業労働調査所へ(野呂も同僚)→独自の調査・分析(26年初頭)→雑誌『大衆』に→ヤンソンを通じてモスクワへ ヤンソン報告→ブハーリンテーゼへ

(2) 「27年テーゼ」に対する評価

・「政治的地位」を発表→「プラウダ社説」(テーゼ要約)に対し「見解の一致」を見出すとともにいくつかの点について注文(自身の立場から評価)

「農民の窮乏化を封建遺制の強さの反映」と見なすことへの警鐘など

※野呂は「テーゼ」の一節を拠り所に猪俣を批判(29年)

・「二つの悪傾向」(福本と山川)の指摘を受けて持論(横断左翼論)を提起→党内改革進まず『労農』発刊 →「苦悩」へ

(3) 「31年テーゼ草案」から「32年テーゼ」へ

・自説を一貫して主張 ※野呂との違い

・その後も共産党へ資金援助 連携も

→「支部」の有無にかかわらず、実質的に運動全体を前進させていくという姿勢

5. 「革命の定式化」への対応

(1) 「歴史的類推」への批判

・ロシアとの状況の違い

・実証的科学的分析を対置(前記)

(2)「幾何学的理解」に対する批判

・第一が完全に完了しない限り‘一足跳び’に第二に移行できない」とする見対し、ブルジョア民主主義的課題もプロレタリアートに託され、ブルジョアジーの打倒なしに実現できないと主張

(3)猪俣の戦略規定～二者択一を超えて

・単純なプロレタリア革命ではない→「ブルジョア民主主義革命の形態をとる」「(一方が他方の)端緒となる」

・革命の「転化」→(国家権力の移動ではなく)プロレタリアートの同盟軍が「農民全体」から「貧農」への移行

→「政治的地位」の最終結論 ※「農民全体」との同盟→無産政党の重要性

(4)一国だけを切り離して、その「本質」を規定する(例えば天皇制国家)という手法への批判

・世界的な帝国主義体系の中に各国を位置づけ特殊性を理解

→世界的革命闘争の一環としての日本革命 中国革命との同盟

(5)アジア的生産様式論の展開

「生産者が自ら結合」し「組織」する力→「新しい労働形態」への指摘も

6.「前衛党モデル」への対応

(1)「意識」「理論」に代わる「役割」「機能」

「自称前衛」に対する批判

(2)「横断左翼」

統一戦線←→前衛結成相互作用

すべての組織における先進分子の結合→全戦線の押し上げ

排他的な左派組織結集に対する批判

(3)「本当の意味の先進分子」(1935年頃)

各種の争議や戦線統一運動で最前線に立つ人たち→生産現場で中軸を担う「おっさん」たち、農村で細々とした日常活動に携わる 農民組合の活動家たち ≠職業革命家モデル

7.独自の思想方法

(1)基本的な人間観

「指導」を必要とするか? →前衛による外部注入

「自発」「自意」によるものか? →媒介役としての先進分子

(2)「本質還元」への批判

ある事象を特定の勢力に「固定的機械的に結びついているもの」としてではなく、「経済的政治的情勢に含まれる矛盾対立の特殊の 特質によってのみ決定される」 例:日本の政治的反動←国際政治情勢から

→「主体」もまた環境との相互作用のなかで

(3)戦略的思考

超越的俯瞰ではなく重層的な戦略場で思考すること

※「三つの源泉」:制度派経済学、プラグマティズム、米国共産党

○猪俣を媒介とした歴史的検証

8. 日本資本主義論争をめぐって

(1) 猪俣による批判

①『農業恐慌と産業組合』序文

「一方は農業の半封建的要素の評価に迷い、一報は資本主義的発展の現実近づけずにいる」

※すでに1930年に同様の指摘

②「封建遺制論争に寄せて」

「自分のグループだと誉め別のグループだと貶めるというやり方では仕様がな

「封建遺制を重視するがイムピアリズムの方が大きい」

「スコラ的で面白くない」

「水田耕作に制約された共同体の内部構造の把握の必要性」

→ 猪俣の対応：

①資本主義の現状分析(『統制経済批判』『軍備・公債・増税』など)

②農村踏査(『窮乏の農村』) 貧農下層の重視→全農の運動方針へ

③アジア的生産様式論(『農村問題入門』など)

(2)「労農派」「講座派」とは？

論争における党派性→戦後へ継承猪俣の位置→？

「東濃派」：「反福本イズムのカンパニア」(高野)

弾圧などの状況変化→猪俣が脱退する一要因

「講座派」：野呂執筆の『講座』内容見本＝「31年テーゼ草案」の立場→「32年テーゼ」直後に方針転換

(→先に結論ありきの「講座」に)

cf: 当時の論争に対する評価

岡田宗司(全農)「あまり関係ないと思っていた」

9. 「猪俣＝高野ライン」の歴史的意義

(1) 労働戦線の再構築

全協→非合法主義へ(反主流の動きも)

合法的分野を維持しつつ争議支援・政治闘争を展開(全協 反主流とも連携)

労働倶楽部→労働組合会議 生産協力→動員体制へ

倶楽部排撃同盟→全労統一全国会議→全評'(1934年)

(2) 幅広い統一戦線の形成

共産党は壊滅状況

・反ナチス・ファッショ粉碎同盟 極東平和友の会(1933年)

労働団体 農民団体 社会運動団体 識者・文化人など

共産党は消極的 ←社民主要打撃論も

→戦後の平和推進会議へ継承(高野)

・「民衆戦線」

加藤' (全評議長)→訪米(英文パンフを猪俣が執筆)→ 野坂と面会
加藤の選挙スローガン「民衆戦線」『労働雑誌』の刊行など
→コミンテルン「人民戦線戦術」以前の運動展開

(3) 運動の担い手

・労働組合の地域組織

地域協議会(争議支援、メーデーなど)→戦後の地区労へ
日本に特徴的なスタイル「遠くの親戚より近くの他人」 脱企業別

・「本当の意味の先進分子」(承前)

「派」を形成しない「イニシアティブ・グループ」(高野)

(4) 「戦前」から「戦後」へ——断絶か継承か？

共産党系の歴史観＝断絶 「獄中十八年」

天皇制打倒→解放軍規定

合法労働運動・統一戦線運動の担い手

→戦後運動の担い手に 1960年頃まで

10. 猪俣: 挑戦の軌跡

- ・自前の政治経済分析とそれにもとづく戦略規定
- ・世界的な帝国主義体系における日本の特殊性の把握
- ・階級分析や農村踏査にもとづく戦略規定' (同盟軍と主要努力の方向＝中立化)
- ・本質還元ではなく矛盾し対立する諸力の相互作用として把握する分析
- ・「テーゼ」策定に向けた資料提供と自らの戦略規定に基づいた評価と注文
- ・共産党の戦略論や組織論に対する「同一陣営」の立場からの徹底批判
- ・意識や理論ではなく機能と役割にもとづく前衛の規定
- ・セクト主義に対する批判と「全運動における左翼」としての「横断左翼」の提起
- ・まず前衛党、まず統一戦線という方針に対する批判と両者の相互作用の強調
- ・弾圧後の無産政党、労働組合の再建に向けた尽力・援助
- ・合法主義、非合法主義に対する批判と合法組織の可能性の追求
- ・前衛党と大衆組織の混同に対する批判と前衛独自の役割の強調
- ・共産党再建を模索しつつもそれに拘らない統一戦線の追求
- ・単なる政権奪取ではなく生産のヘゲモニーや自治の獲得をめざす革命観の提示

おわりに

「補助線」としての猪俣

横断左翼→セクト主義からの歴史の解放

組織・指導者・派の歴史→労働者・農民大衆、イニシアティブ・グループへ

権威づけられた正史→共鳴し合う歴史

切断された歴史→継承された歴史